

●「それでもお前は勝者なんだよ」(紺)

——それではインタビューの続きに行こうと思うけど、次は紺だね。

利「紺は反省会にもっともふさわしいね」

紺「てめえに言われたくねえよ」

利「いや、自分は紺よりはマシだよ」

薫・汝緒「どっちもどっちだ」

葵「あんたたち妬けるほど仲良いわね」

利「へへ」

妖華「さすが利、総受けだね！」

利「ちょー！ 妖華！ どこでそんな悪いことば覚えてきたの！ (妖華の肩を掴む)」

妖華「えー？ 悪くないよ？」

薫「つうか意味わかんねえよ(笑)」

桜「そもそも悪い知識は妖華の方が遙かに上だろ。エロいんだから」

利「エロいとか言わないでよ。いや、エロくてもいいんだけどさ……(と言って照れる)」

哀「妖華って、名前がね。妖艶な華、なんて、すごい名前だよ」

利「でしょ？ すごいでしょ？」

薫「お前は何なんだ」  
桜「双子ですから！」

哀「本名がヨウカなんだっけ？」

妖華「(首を振る) ヨウ、葉っぱの葉、でヨウです」

利「かわいい！」

哀「利は女子高生ノリだね、妖華については」

葵「アタシも本名変わってるって言われるけど、葉は珍しいわよね」

薫「ベニタニって本名他で聞いたことねえわ」

葵「四国のほうにはいるのよ」

利「へえ〜！ え？ 四国出身だっけ？」

葵「東京(笑)」

——あー、紺が喋ってないよ(笑)

紺「チッ」

利「さあ反省をどうぞ」

薫「お前がいちいち口を挟むから脱線するんだよ」

利「……ごめんさい(しよんぼりする)」

薫「可愛こぶってもダメ」

利「チッ」

哀「似てるなあ……」

桜「気づいたら兄弟のように(笑)」

妖華「一緒に寝てたんだし」

薫「それで何もなかったってんだから愕きだよ(店員にビ

ールを注文する)」

利「昔はそういう関係じゃなかったしね」

紺「昔はって何だよ(眉を寄せる)」

桜「照れんなんて！」

紺「照れてねえよ！」

薫「お前どうせ一目惚れだろ、無自覚の」

利「かもねー(笑)」

紺「てめえマジで黙らせるぞ」

利「やるか！」

紺「(睨んで黙る)」

——まあまあ。それで、紺の初登場は高校の廊下だった

んだけど、本当のところ利のことはどう思ってたの？

紺「どうもこうもねえだろ！ クソチビとしか思ってたねえ

よー！」

利「カッチーン」

薫「擬音使うな、秋葉原っぽいぞ(笑)」

利「ムカ！(笑)」

桜「紺って、どーも大人になるってことを知らないヤツだ

よな。ずーっとそのまんま」

紺「クソチビにも言ってるやれよ」

利「おい」

葵「なんだかため息出ちゃう。ここまでツンデしだと本当

に漫画みたいなんですもの(ワインを飲む)」

紺「……(葵を睨む)」

葵「まあ、素直になれって言わなくても、突然素直になっ

ちゃうからいいんだけどね」

紺「ならねえよ！」

汝緒「……(含み笑い)」

紺「汝緒！」

汝緒「……(笑)」

利「いつもあだだと可愛いんだけどねえ(頬杖をつく)」

妖華「ほんとだね」

薫「(ニヤニヤする) 俺ははっきり聞いたぞ、絶対に誰に

も触らせたくなかったって言ったのを」

紺「……は！？ (赤くなる)」

利「は！？ (薫を見て紺を見る)」

葵「やだっ、赤い、赤いわよ！ どうしましょう！ (胸に

手をあてる)」

紺「そんなこと言ってるねえよ！ (ドス声)」

利「そんなこと聞いてねえよ！」

薫「いいや、言った。なあ？ (哀と皓を見る)」

哀・皓「言った」

紺「……(目を開いたまま黙り込む)」

薫「まあ、あんときのお前はダメな状態だったからな」

利「い、いつ？」

薫「あんとき——」

葵「悲愴の三十話。正しくは、絶対に他の誰にも触らせな  
くなかった、でしょ」

哀「おー」

利「あー……どうりで知らないわけだ……自分死んでたわ」

薫「死んでたわ、じゃねえよバカ」

紺「……あー……(目を閉じて額を摩る)」

葵「思い出した？」

紺「……(ビールを飲む)」

——やっぱり、あの事件が一番紺にとっても記憶が強い  
かな。

紺「強くねえわけねえだろ……(弱く眩く)」

哀「お前と汝緒は一番後悔してるだろうからな」

紺「……うるせえ」

葵「泣いてもいいのよ。お兄さんたちが介抱してあげるわ  
よ(と紺のジヨッキにビールを注ぐ)」

薫「お兄さんたちって……(苦笑)」

妖華「葵さんの外見でお兄さんっていうのがいいんじゃない  
ですか」

葵「そうよわかってないわねえ、相変わらず！」

薫「はいはい、倒錯者たちの言いたいことはわかりました」

利「わかってなくて化粧する男にはならないよ」

哀「薫は女装とか普通にできるタイプだからな」

薫「そういう誤解招くようなことを言うのはやめろ、面倒

だから！」

紺「……(じいっと薫を睨んで鼻で嗤う)」

薫「ほら見る」

利「スカートとかははかないけど、この系統のバンドマン  
なら女っぽい格好をするのは一度くらいはやるよね」

紺「ねえよ」

利「確かに紺はそういう系統やんないねえ。汝緒さんのほ  
うがいいね」

汝緒「ねえよ(苦笑)」

利「汝緒は地味な格好でも綺麗だからいいね(強く頷く)」

薫「疑問だったんだけど、紺はこういうのは嫌じゃねえ  
の？」

紺「は？」

薫「利が汝緒にキラキラしてんの(と言って利を見る)」

紺「ああ……」

利「キラキラ？ してる？ ……してるか」

薫「俺ならずと傍にいて、常に利が汝緒にキラキラして  
たら耐えらんないだろうけどなあ(うなじを掻く)」

汝緒「……こっちらしたら常にあんたにキラキラしてる  
けど」

薫「そうかあ？(眉を寄せる)」

汝緒「どう見ても(苦笑)」

皓「白馬に乗った王子様だからな(笑)」

薫「今頭の中が暴れん坊將軍になったんだけど」

利「そっちー！？ でもいい！ チョーいい！」

哀「てててーってててててー！(テーマ曲を歌う)」

利「侍似合う！ 髪型も合う！ 格好良い！」

薫「やかましいな……(笑)」

皓「これがキラキラ(笑)」

桜「ちよっとみなさんキラキラされない紺の気持ちを察し  
てくださいー！」

紺「(桜の頭におしぼりを投げつける)」

桜「(爆笑)」

利「えー、紺ちゃんのこと大好きだよ？ 大好きじゃなけ  
りゃ一緒に寝ないよ。腐れ縁的な何かだよ。ね。(紺を見  
る)」

紺「……(横目で見返す)」

桜「はい、キース！ キース！(手を叩く。全員爆笑)」

薫「やめるやめる、普通にできるぞ、こいつは(半目で利  
を見る)」

——でもみんな思っていた疑問だろうね。紺は汝緒には怒  
らないっていうこと。たまに言い合いはしても、他の人な  
ら殴っているところを、汝緒には手を上げない。利と汝緒  
が何をしても怒らないよね。

利「だって紺ちゃんは汝緒さんラブじゃん」

紺「気色悪い言い方すんな」

薫「汝緒のことしか認めてないんだろ？」

汝緒「俺のことだつて別に認めてねえだろ」

薫「いや、俺はダメでも汝緒は可、って感じだろ」

紺「誰だつて可じゃねえよ」

葵「あらまあ(口に手を当ててにやつく)」

紺「いちいちうるせえな！」

葵「いやーん怖い」

薫「一番腕っ節が強いやつが何か言ってるよ」

桜「やっぱり葵さんってケンカ強いんだ……」

哀「紺とタイムマン張ったつて勝てんじやないの」

葵「バカね、そんなわけないでしょ、乙女なのよ」

皓「ビール下さい(襟に向かつて)」

利「でも実際紺は汝緒には優しいじゃん、汝緒が自分とい  
ても怒らないよ」

汝緒「……自分で言うか、そういうこと(横目で利を見る)」

桜「紺と汝緒の扱いは利が一番だからな(笑)」

利「一番？ そんなだったら色々苦労してないわー！」

紺・汝緒「(複雑な苦笑い)」

薫「紺にとつて汝緒は、ギターリストとしても友人としても  
相方だつてことなんだろうけど、それにしても恋敵にはな  
らないのは不思議なところだな……」

紺「恋敵？ フン。敵にもなんねえんだよ(ゲップをする)」

利「汚えなあ」

桜「なんだ、余裕で俺の方が上ってか？」

紺「……うっせえんだよ（眩いてビールを呷る）」

葵「うんうん、貴方の気持ちはわかるわよ（紺のジョッキにビールを足す）」

薫「あー……なるほどな……。いや、俺もお前の気持ちはわかる（と喋って葵のビール瓶を横から奪って紺のジョッキに注ぐ）」

利「なんだ、なんだこの感じ」

哀「汝緒は絶対的勝者なのか。切ないな。お前ら」

汝緒「……（訝しげな顔）」

利「なんか、自分、どうしたら良いかわからないんですけど……」

葵「ここで薫のことが好きって言ったら気まずいものねえ、大変な立場だわね、利は」

妖華「モテる男は困るね？（笑顔で利を見る）」

利「う、うん……？（笑顔を返して首をひねる）」

——紺は利が「美狂毒蛇」から脱けたとき、汝緒に本音を言いかけていたよね？ 自分がなぜ利を美狂に入れたのか、汝緒にはわからないだろう、って。

紺「だからどうした」

汝緒「飲んで自棄になってんじゃないよ……」

利「結局いまいちよくわかってないんだけど、自分」

薫「お前は大変な立場にすぎず理解もできなかっただろ

うよ」

利「うん」

桜「パニツクのうちに流されたって感じだな」

葵「紺は、汝緒が邪魔なんじゃないわよね。勝てないものわかってる」

利「うん？（眉を寄せる）」

葵「そう。利を美狂に入れちゃったのは、自分も触れなくなるっていう代償を払って、汝緒も触れなくした……わか

つてる。お兄さんは全部、わかっているわよ（頷く）」

利「そ、そうなの？」

紺「……（船をこいでいる）」

利「寝るな！（笑）」

汝緒「寝ざるを得ないだろ（苦笑）」

利「なんか汝緒って紺のこと庇うよな、可愛がるよなあ（口を尖らせる）」

薫「お前がむくれるのは贅沢だぞ（笑）」

利「もう紺と汝緒結婚しちゃうば？」

汝緒「まだどうしようもないことを言い出したな。お前が寝る」

利「冷たい。冷たい。紺には優しいのに、冷たい」

紺「（むくりと顔を上げ）汝緒、結婚するか」

全員「（爆笑）」

汝緒「だからこいつに酒を飲ませるのは嫌なんだよ」

利「どっちが嫁？」

紺「汝緒」

妖華「死ね」

妖華「どうでもいいけど、紺酒くさい……嫌。（鼻をつまむ）」

——でも汝緒の方も紺を認めている。紺と利が何していても、嫌そうにするどころか、なんだか嬉しそうにしてるよね。

利「汝緒さんにとっては子育てですから（笑）」

紺「誰が子供だ」

利「おめーだよ」

紺「なら汝緒とお前が夫婦つつのか！」

葵「そうなるわね」

皓「……やめるよ（嫌な顔で葵を見る）」

紺「ふざけんなよ！」

汝緒「もう本当に寝とけよお前……」

桜「汝緒の余裕って、さつき哀さんが言ってたみたいに絶対的勝者だからの余裕？」

汝緒「……絶対的勝者なんて、誰が決めたんだよ。現に勝者じゃねえだろ」

紺「それでもお前は勝者なんだよ」

薫「潜在的なところで利の本命でいる」

利「ずいぶんはつきり言うな……（薫を上目で見る）」

汝緒「それなら『陣』っていう人の存在はどうなるんだよ」

利「うっ……」

——最終的に陣さんに行き着くわけだね。

葵「だーれも勝てやしないのよ！ あのお方には！」

利「嬉しそうだなあ（笑）」

——なんだか、結局紺が答えてないね（笑）。

紺「もともと付き合う気なんかねえよ」

利「この場にちゃんと来たことが奇跡」

紺「仕事だって聞いて来たらこれだよ。クソ」

——やっぱり人前で紺の内部を探るのは難しかったかな。

薫「自叙伝とか書かせるべきだな、紺と汝緒には」

利「徹夜で読むね」

桜「本なんか書かなくても誰から見ても汝緒も紺も本音が丸わかりだと思っけど」

葵「そうね」

哀「ファンから見たらどうなんだろうな」

利「仲悪そうに見えるんじゃない？（笑）」

葵「嘘よ。あからさまに二人で利を可愛いがってるのが見え見えよ」

利「えーっ、そんなことないでしょ」

妖華「TOURNIQUET、利総受けかあ……」

利「妖華！（肩を掴む）」

桜「待って待って、俺も入るの？」（笑）」

妖華「入らないの？ 楽しいよ？」

利「妖華！」

全員「(爆笑)」

薫「サークルかよ」

紺「事実利を可愛がりましようサークルじゃねえか。ケツ」

全員「(紺をじっと見る)」

紺「……んだよ(首を引いて眉を寄せる)」

利「紺……(うるうるした目で隣の紺を見る)」

紺「な、なんだよ……(たじろぐ)」

薫「こらお前、その距離でその顔禁止！」

妖華「やだよだっ、俺にも見せて！(利の肩に両手でしがみつく)」

紺「(ふと、睨む薫を見てにやっと笑い)はっ、そうだよ。

可愛がりましようサークルだ、いろんな意味でな！」

利「……え！」

薫「くおらあ！(腰を上げて利に覆い被さる紺の胸の前に

腕を割り込ませる)」

汝緒「……(深々とため息を漏らし、倒れそうになる紺の

グラスを受け止めて嫌そうな顔を首を引く)」

葵「やだあ、誰よ紺にあんなに飲ませたのお」

哀・皓「お前だよ」

葵「保護者しつかりしなさい？(汝緒を見て)」

汝緒「(無視)」

妖華「あははは！ やっぱり楽しい！(傾く利の背に抱きついたまま)」

桜「うーん。俺はホモじゃなくていいんだけどなあ。まー

でも、利のことは可愛いしなあー」

紺「おいテメエナメてんじゃねえぞ(薫に引き戻されながら桜を睨む)」

桜「何をだよ(笑)」

皓「誰かまとめるよ」

——あー、よいか、みんな。先に進めたいんだけど……。

葵「大変な仕事ねえ」

哀「もう少しまともなバンドのインタビュの仕事だったらしいのにな、ご苦労様」

——紺だけです、ごページ数だよ(笑)

紺「んだコラ、文句あんたら帰ってやるよ」

——そういうことを言いたいわけじゃないんだけど……。

利「紺は酒の席はダメだよ！ ほんとに！(妖華に背中を支えられながら体勢を戻し、髪を整える)」

葵「やっぱ放っておいたら突然素直になったわね(笑)」

薫「素直になりすぎんのも考えもんだ。ったく……」

——紺も個別インタビュがいいかな。

利「答えないと思うなあ」

薫「お前がインタビュアーになれば、答えるかもな」

——じゃあそのときは利同席お願いするよ。

利「オッケー」

紺「(据わった目でぼっとしている)」

——もう紺は眠いのかな。まとめると……、紺にとってT

OURNIQUEETは、利を可愛がりましようサークルっ

てことていいかな(笑)。

紺「ああ？ ……ああ(頷く)」

利「うわっ、本当に眠いんだね……」

薫「なんか、無性にアイツが可愛く見えてきた」

葵「出たわ。薫の庇護欲」

哀「薫と紺か、ゲローっ」

薫「何想像してんだよ！ 怖えな」

利「複雑な気分」

桜「自分が一番愛されないと不満なんだろ(笑)」

利「違うよっ、なんか嫌な言い方だ！」

桜「ムキになるあたり(笑)」

妖華「欲張り。可愛いね」

利「……もう(と照れる)」

桜「相変わらず気持ち悪いなお前らって」

——次は、今の席の並びで行くと、利？

妖華「利はやっぱりトリじゃない？」

利「え、さっき答えたよ？」

妖華「なんか物足りないよ」

利「いいよう。妖華ちゃん行こうよ」

——最初に利には聞いたんだね。利もまたあとでロングイ

ンタビュに答えてもらおうとは思っているよ。

利「それが仕事なら、顔作んなきゃ(両手で頬を叩く)」

哀「利の仕事でのクールっぷり、ずるいよなあ」

利「人見知りですから」

薫「意外とな」

桜「そうかも」

利「だって緊張するでしょ。はい、妖華ちゃん行ってみよ

った？ 率直に。」

●「利と出逢ったとき、俺少し怖かったです」

(妖華)

——じゃあ妖華、「悲愴」と「絆」終わったけど、どうだ

った？ 率直に。

妖華「俺は、とにかくずっと悲しかったから」

利「妖華は一番、神経が細いから」

桜「会った時点で病んでる感じがしたからな(笑)」

利「そこが綺麗で良かったんだ」

妖華「でも高校の初めの頃は、なんともなかったよ。神経

質なタイプっていうのはあったんだけど」

薫「見るからに」

妖華「そうですか？」

利「いいじゃん、綺麗だよ」  
妖華「利に言われると嬉しい」  
利「すごい綺麗だったよ、一目惚れだもん」  
桜「綺麗以外言えないのか(笑)」  
薫「初めて見たときは、うわー、大変そうな子だなって思ったけど」  
妖華「大変そう、ですか?」  
葵「生きるの辛いのかなって、ね?(薫を見る)」  
薫「そう。良くも悪くも音楽しかないんだろうなって感じで」  
利「それがいい」  
薫「いやわかるけど(笑)」  
妖華「内向的ではありません。こんなだから、あまり友達もいないし(手を広げて身体を見る)」  
——細くて女の子みたいだからからかな?  
妖華「たぶん」  
利「こんなに綺麗な子、放っておくかな普通?」  
桜「あのな、お前と世間のズレを認識しとけ?」  
利「なにそれ!」  
桜「妖華の悪口じゃないよ。普通の価値観で考えたら、女の子っぽいってだけでいじめられるんだぞ。それにお前と違って、世間一般的に高嶺の花つてのには手を出せないもんなの」

利「えー。うーんそう言われたら……(といって全員を見直す)、そつなのかあ。みんな綺麗だし」  
紺「お坊ちゃまはご所望のものはなーんでも手に入れて貰えるからな(呂律が回らない)」  
利「……むかつく」  
薫「実際手に入れてるから有り難みがわかんねえんだよ」  
利「……」  
薫「あ。ごめん」  
哀「なんで一番味方であるべき奴がいじめた(笑)」  
葵「もう知らない! かおるきゅんのバカ!」  
皓「うるさ……」  
利「あーおーいちゃん! (立ち上がってテーブルを回り込み葵に抱きつく)」  
葵「おーよしよし、バカオルがふざけんなよね(抱きしめる)」  
薫「黙れ(笑)」  
紺「バカオル……」  
薫「黙れ」  
葵「あんな奴やめて、俺のところにおいで。可愛がってあげるよ(利の顎をあげて)」  
利「葵さん……! (笑)」  
薫「やめるよ(笑)」  
妖華「やっぱり葵さん格好良い」

葵「君も可愛がってやるよ、おいで?」  
桜「二人同時に! さすが姐さん!」  
葵「ノンノン、兄貴と呼びな」  
哀「げー(笑)」  
皓「すげえよ利は。マジでそう見えるから(頬杖をついて利を見る)」  
利「何が?(振り向く)」  
皓「プリっ子が違和感ない」  
利「えー、違和感ないんじゃないやなくて素ですよーお」  
薫「やめる(笑)」  
葵「あまり可愛いと困るものねえ」  
薫「そうそつ……ってオイ痛い奴じゃねえかよ俺」  
紺「イテエ(いかにも馬鹿にした顔で薫を見る)」  
薫「お前は黙れ」  
桜「案外相性良いですよねえ、やっぱり(薫と紺を見比べて、チューハイを頼む)」  
薫・紺「やめる」  
妖華「珍しい、おわかりだね(桜を見て)」  
——妖華の話に戻ろうか。  
妖華「え? ああ、そつですか」  
——それにパーソナルインタビューみたいになっちゃったから、それは今度ロングインタビューで話して貰うとして、絆と悲愴の感想だね。

妖華「はい。そつでした」  
利「妖華ちゃんには悪いことしたと思ってる」  
妖華「どうして?」  
紺「フェー(妖華に口をふさがれる)」  
利「汝緒さん、紺のことシメていいよね?」  
汝緒「好きにどうぞ」  
利「明日の朝、大黒ふ頭に浮かぶのかな」  
桜「よせよ、リアルで怖いよ(苦笑)」  
妖華「利と出逢ったとき、俺少し怖かったんです」  
利「え?(顔を上げて妖華を見る)」  
——それはまた、なんで?  
妖華「俺、依存体質だから。この子がいなくなったらどうなっちゃうんだろつ、って、会ったときに思った」  
——随分と早い段階で……。  
妖華「なぜかすぐに思いました」  
桜「でも避けなかったんだ。バタフライ速脱けて利取っただろ」  
妖華「うん。あーあ、つて思った。会っちゃった、つて」  
利「……(唇が少し震えている)」  
妖華「どつしよう怖いなって思ったけど、しょうがないか、つて。会っちゃったんだもん。抵抗できないよ。それにあのときの利って、すごい強い目してて、断ったら怒る、みたいな顔してて」

利「そ、うだったかな……」

汝緒「いつもそういう顔だな、お前。言うことを聞かないと泣くくらい顔してる(煙草の箱を覗く)」

利「そんなことないよ、いや、不安だったよ？(ウルウルした目を誤魔化すようにニコニコ笑っている)」

妖華「そうだね。不安そうでもあった。だって何の活動もしていないバンドに入れていってるんだから(笑)。でも、この子とやったら幸せになれるって、思ったんだ」

薫「あー、泣いてしまうな(利を見る)」

利「泣かない。泣かない(と明らかにこらえている様子で)」

妖華「でもなんとなく、わかってた気がするんです。必ず泣くようなことが起きるって。失うことがいきなり怖かったのも、それをわかってたのかな……」

葵「妖華が纏う儂いオーラは、最初から失うことに怯えるオーラなのね」

利「妖華にとって、失うって、なんだろう……？」

薫「俺が連れていっちゃったからな……」

妖華「いいえ、薫さんが連れて行ってくれないければ、あのとき利は、明らかに……死んでいました(声が震える)」

利「……(黙って俯く)」

妖華「それに、それ以前のお話です。なんででしょう……利との、関係みたいなものでしょうか。……たしかに、薫さんに取られちゃいました。でもちゃんと、返してもくれて

います。薫さんが俺たちのこと許してくれたから、今は前みたいに辛くはないんです」

哀「俺たちって、妖華は何もしてないだろ？(眉を寄せる)」  
妖華「(首を振って)してます。俺は傍にいたのに、利を助けてやれなかった。むしろ、傷つけました……」

利「それはないよ！(葵が利の背を撫でる)」

桜「それ言われちゃうと、俺もキツイよ……(額を抑えて苦笑い)」

利「……どうして？(泣きそうになっている)」

桜「あのとき、俺らはもっと他にやりようがあった。警察呼ぶなり、何かしらすればよかったんだ。でも俺たちはそれができなかった。思いつきもしなかった」

薫「お前たちはよく耐えたよ。大丈夫。ちゃんとわかってるから、もう良いよ」

妖華「……(俯いてぼろぼろと涙を流す)」

葵「ほらあ、もう過去のことなのよ！ それに誰だってそうなるわよ。メンバーを警察に売りたい奴なんか、いないわ！ ね！(利の背を叩いて微笑む)」

哀「そうだよ、悪いのは紺と汝緒だから！(笑)」

紺「……(船をこいでいる)」

汝緒「(テーブルに目を落としながら煙草を吸っている)」

利「もー！ 大丈夫だよ！ 生きてるし！ 無事に今があるんだし！(涙を拭って笑う)」

薫「利がそう言ってるんだから、そうなんだよ」

利「汝緒さんと紺には、一生かけて自分のワガママを聞いてもらうから、大丈夫！」

哀「奴隷(笑)」

葵「すでに精神的にはそうじゃない？」

紺「あー寝よ寝よ(後に倒れ込んで横を向く)」

妖華「俺も利の奴隷だよ。薫さんみたいにはなれなくても、俺も利を護るよ(利を見てにっこりとして、涙を拭く)」

利「妖華……(立ち上がったって妖華の隣に戻り、抱きしめる)」

桜「奴隷だよって言って熱い抱擁をかわすって、おかしいだろ(目尻を拭いながら笑う)」

## ●「俺がなんとかしなきゃって思っちゃうんですよ」(桜)

——それじゃあ奴隷宣言が出たところで(笑)、桜に続いてもらおうかな。

桜「俺ですかー？ 俺も最初の方で喋っちゃったんですよ」

薫「何が一番苦労してるのが桜だって話だな」

桜「そうですね。自分が一番苦しかったなんて言えないけど、俺って結構楽天的だから、あそこまで追い詰められ

たことなんかなかったんすよ」

妖華「きつと、汝緒が一番、桜に悪いことしたって思ってるんじゃない？(と並びの汝緒を見る)」

桜「まーね、俺殴られたし！(両手を腰にあてる)」

汝緒「(苦笑いをして煙草を吸う)」

薫「まあ、そうだな。その辺は……ちよっと、話題変えようか(向かいの利を見て)」

葵「そうね」

利「(黙って俯いている)」

桜「そうですね！ もっと楽しかった思い出の方に行きましよう！(利の背を叩きながら)」

紺「汝緒はクソ野郎でキチガイだったことで(横になったまま言っ)」

汝緒「てめえだけには言われたくねえ(苦い顔で紺を見下ろす)」

桜「利がモテちゃうからいけないんだなー！ こんな可愛いから」

薫「じゃなくて。モテるこいつが悪いんじゃないかって、好きになっちゃう側のやり方の問題だから(左手をひらひらと振る)」

桜「あー、そうっすね……いけないって言い方はだめか」

葵「自分のせいなんて思わないようにね(利を見て頷く)」

桜「ごめん、変な言い方した(利の肩を抱き寄せる)」



利「いいよ、いいよ。大丈夫だよ（くすぐったそうに顔をしかめて笑う）」

桜「でも、可愛すぎて困る！」

哀「同意！ でもそこで頷いてる薫、痛い！」

薫「放っておけよ（笑）」

葵「やらしい顔しないでよ！」

薫「してねえだろ！ 読者に誤解与えるな！（笑）そもそもなんでお前らが可愛いっつうのは許されて、付き合っちゃまった途端に許されなくなるんだ。これだから日本人っていうのは（煙草に火をつける）」

葵「コイツ……」

哀「何気付き合ってるってそこ自慢ぶち込むなよ」

皓「ぶち込んでたな（頷く）」

薫「いつからうちのバンドはこんなに俺に攻撃的になったんだ？」

妖華「利を恋人にした代償ですね？（微笑む）」

桜「怖え、妖華……」

薫「……」

葵「どんなにファンでも利の恋人って意味では、恋敵なのねえ……」

——利は本当に皆に愛されてるね。

利「……はいそうですねって、言える？ 恥ずかしいよ。

ていうかなんで桜が、困っちゃうんだよ（俯きがちに桜を

見る）」

桜「えー？ 俺だって結構、キュン！ ってくるよ！」

利「キュン！？」

妖華「やっぱり利総受けなんだ、うちのバンド」

利「……妖華ちゃん（睨む）」

妖華「本当のことじゃない、いいでしょ？」

桜「お前いじらしいから、時々、きゅんってなる。とかー、曲あわせてても、上手く歌えないと腹立てて悔しがって、もう一回って俺を見るだろ。あの顔も毎度キュンってくるんだよねー」

利「意味がわからん……」

薫「一生懸命な顔は確かに可愛い」

葵「いつでも可愛いと思ってる奴はお黙り」

薫「はいはいすみません（笑）」

桜「笑って利に目を戻す（お前と初めて会ったときに、わー随分と綺麗な子がいるなーって思ったよ。それでなんか無表情だし、つき回したくなるだろ？」

利「つき回したくなるって……」

桜「この子何考えてるのかなーって！ 絶対にバンド好きだろうと思っただから、他の奴にとられちゃう前にとっとゲットしとかなぎゃ！ って思ったし」

薫「ゲット……（笑）」

哀「やっぱり利ちゃんはモンスターのな何かだったんだあ」

妖華「戦わせられません！」

哀「なるほど、愛玩用かあ」

薫「おい卑猥になってきたからよせ」

利「薫君のほうで卑猥だけど……」

葵「変態ばっかで困るわ」

皓「どの口が……」

——利がどれだけ愛されているか、よくわかるよ（笑）。

利「ここでわかられても困るんですけど」

桜「でも本当に俺たち、利のこと愛してるよ。（真っ赤になつた利を見て微笑む）利だけじゃないよ、メンバーお互い思い合ってる。そうじゃなかったら、とっくに逃げ出しますよね。俺めんどくさいこと、嫌いだもん」

薫「よく面倒くさい極みみたいなお前」

桜「それもこれも、やっぱりメンバー愛ですよ。一緒にいるうちに、本当に離れるのが辛くなった。だからすごい辛いことがあっても離れられないし、俺がなんとかしなきゃって思っちゃうんですよ」

全員「（深く頷く）」

哀「なんか夫のDVに耐える妻みたいな感じだ（笑）」

葵「アタシがいなきやあの人たダメになる、だからアタシが頑張らなきゃ」

薫「あれ？ 利くん耳が痛いな？（利を見る）」

利「あれ？ 紺ちゃん耳が痛いな？（紺を見る）」

紺「（いびきを立て始める）」

薫「ため息を漏らす（問題児どもめ……」

桜「ははは。ほんとですね。ドメスティックバイオレンスってすごい単語ですね、俺らじゃん（笑）」

皓「笑えねえぞ……」

——桜はなんか、もう笑うしかないって感じだね。

桜「うん、泣いても始まりませんから。泣いたらそのぶん、取り込まれちゃうでしょ。そうやって沈んでる時間が嫌だから、だから俺小さいころからあんま泣かなかつた。泣いてもちくしょーってなって立ち上がる感じ」

薫「それがお前の強さだな。お前がいてくれて本当によかつたよ」

桜「やだな、よしてくださいよ！（照れくさそうに笑う）」

薫「真面目に。お前がいなかったら、利はここにいないかつたかもしれない」

利「うん……」

桜「いやっ、薫さんが助けてくれたんじゃないですか」

薫「俺はその後だから。要するに、お前が俺に繋いでくれたんだな」

葵「そうね、薫が利とこういうことになれたのも、桜が頑張ってバンドを支えたからだわ」

桜「いやっ、よしてくださいよ！ 俺なんもできなかったって、さっきも言ったけど……」

哀「利がLSDで歌ってくれるのも、利を救ってくれた桜のおかげってことになるな！　ありがとう（頭を下げる。LSD全員が続く）」

桜「ちよ、よしてくださいよ……！（目を見開いて両手を振る）」

薫「桜がいなかったら破滅にしか向かわなかったかもな。桜以外みんなこんなじゃねえか（神妙な面持ちの利たちを見て笑う）」

哀「暗っ（笑）」

桜「ホントだ……根暗バンドだ……（笑）」

葵「レアよね、桜」

桜「なんで俺このバンドに入ったんだろう（笑）」

利「入ったっていうかメンバーかき集めたのって桜じゃない（笑）」

桜「そっか俺がこの根暗たちを集めたのか（笑）。でも本当は暗くはないよね！　結構喧しいバンドだよ俺ら」

妖華「うん、賑やかなバンドに入ったなって思ったよ？　汝緒だけ静かだった」

薫「なんとなく、お前たちの曲がドロドロしてんのに激しい理由がわかったわ」

——**やっぱり、桜は今後もTOURNIを支えていく立場**

だね。

桜「ドラママーですからね！（胸を叩く）」

薫「リズム隊は一步後でバンドを支える、だな」

桜「妖華と同じく、薫さんみたいにはなれなくても、俺らは俺らで、精一杯利と、あとコイツらを支えていかなきゃならねーっす（TOURNIメンバーを見回してにっこり）」

——ファンの子たちみんなも桜に感謝すると思うよ。では、とりあえず全員終わったので、またファンからの質問に行こうと思うけど、いい？

利「陣、まだかなあ……（携帯を出して）」

薫「陣さんに聞かれたらまずい質問があると困るから、早いところ始めようか（苦笑）」

### ☆ファンからのインタビュー②

——では一つ目。利への質問「薫と付き合っていくうえで大切にしていることは？」

利「大切にしていること、うーん、そうだなあ。言うことを聞くとか、嘘をつかないとか」

薫「うそつけ」

哀「さっそく（笑）」

利「なんでだよー！」

薫「頑固なお前が俺の言うことなんか聞くかよ。結局最後は自分の判断を信じるだろ」

利「えー、でも聞くようにしてるよ（唇尖らせる）」

薫「昔に比べたらそうかもしねえけど」

桜「でも俺の言うことを聞け！　だなんて、薫さんって亭主関白なんすね」

葵「実際に敷かれてるのは薫だけだね」

薫「うるせえよ」

哀「惚れた弱み。しょうがない。（しみじみと腕を組む）」

利「あ、でもね、なるべく薫君と離れないようにしてる」

桜「離れたくないだけだろ（笑）」

利「やっ、ちが、や、そうだけど……そうじゃなくて！」

葵「紺は？　寝てるの？（首を伸ばして）」

妖華「寝て……るように見えます」

葵「寝てるならいいけど、ちよっと悪夢にうなされる可能性はあるわね」

利「紺なんてどーでもいいよ（笑）薫君とは離れてる時期があったから。それで、そのまま、フラれちゃったから……

……。そういう気持ちになってほしくないから、なるべく離れないようにしてる」

薫「フラれって。逆だろ」

葵「逆よ逆」

薫「お前は黙ってる（笑）」

利「愛想尽かされてフラれた感じだったよ」

薫「本当にお前のことを考えたら、引かざるを得なかったんだよ（と言って汝緒を見る）」

汝緒「本当に引く気なんて、なかったんじゃないのか（煙草を灰皿に押しつける）」

薫「……いや、あときは本気だったよ。利が事故る前からなんとなく気づいてた。利はお前のことだけは特別だったって」

利「……そうだ。付き合っていくうえで大切にしていること。薫君に汝緒のこと、考えさせないようにすることだった（ぼそぼそと）」

葵「お気遣いねえ」

薫「それもわかってるよ。自分が好きなのは薫くんだけだから！　って言い聞かせようとしてるのがわかる」

哀「薫の利マネうざい」

葵「利に乙女入ってるわよね（横目で薫を見る）」

哀「薫の中でどれだけ利が可愛いかわかんない、キモい」

薫「うるせえよオカマども」

利「確かに薫君ってちよっとフィルターかかっているよね……（横目で薫を見る）」

薫「オイお前なんでそっこの味方だ（笑）」

桜「さっきの仕返しですわね（笑）」

利「そうだなあ。やっぱり、誰のことが好きなのか。それ



をわかって貰えるようになっていうテーマはある。ンでもまあ、結局意識なんかあんましてないけど……」  
妖華「勝手に好き好きオーラが出ちゃうの？」  
利「……やめてよ(ちよっと赤くなる)」  
桜「出てるよ、利は出てるよ」  
薫「詳しく聞かせて貰おうか(笑)」  
利「うっさい！」  
桜「いつとも薫さんのこと考えて意識飛んでるって感じ」  
利「うっさいよマジで！」(桜の肩を叩く)  
桜「TOURNーの仕事してても、暇さえあればすぐ携帯いじってる〜(ニヤニヤする)」  
利「あ、ほら、陣が来ちゃうとまずいかもなんでしょ、次行こうか！」  
薫「じゃ、俺の代わりに葵先生、よろしく」  
葵「あー利ってほんっと、可愛いわ……」  
薫「ありがとうございます(笑)」  
葵「……高くつくわよ」  
薫「仰せのままに、女王様」  
利「次は？(平然とした顔で)」  
——では二つ目。薫へ「無人島に1つだけ持っていけるとしたら何を持っていく？」  
葵「利」  
利「ぶっ」

薫「ここまで答えて頂いて申し訳ないです女王様」  
葵「あーうっとうしい」  
利「どM……」  
桜「でも利じゃ生殖できないですからねえ、どうするんですか？」  
利「なっ、な……」  
皓「生々しい(苦笑)」  
哀「それに、結構それ、ディーブな話じゃないか？」  
薫「(少し落ち込んだ様子の利をちらっと見て) いいんだよ。子どもが欲しけりゃ、貰えばいい。あ、無人島に連れて行けるの？」  
妖華「……俺、本当に、薫さんが利を助けてくれたことに、感謝します」  
桜「うん、俺も感謝します」  
薫「よせやい、くすぐってえ」  
桜「兄貴〜！(笑)」  
汝緒「江戸っ子(苦笑)」  
薫「江戸っ子江戸っ子。下町だから」  
桜「マジすか」  
薫「そうだよ」  
利「言われてみれば、みなっちゃんもちゃきちゃきだね」  
妖華「ちゃきちゃきってどっついう意味？」  
利「……わかんない(笑)」

哀「パーンって金使うあたり江戸っ子なのかな」  
皓「言われてみれば」  
葵「だから平気で利ひとり連れて帰って来ちゃうのよ」  
桜「江戸っ子の定義がよくわかんないけど、なんとなく納得すね」  
利「でも無人島に二人でいっても、困るね」  
薫「何で。幸せすぎてる？」  
紺「死ね！」  
葵「ぎゃー！生きてたのね！(全員爆笑)」  
薫「ははは。そろそろ調子に乗んのやめとくわ。気の毒な奴がいるから(紺を見て)」  
利「紺とも無人島行くよ。大丈夫だよ(再び横になる紺に)」  
妖華「……なんか、一気にエロ漫画みたいになっただね」  
利「えー？」  
薫「妖華、お前、なんてこと言い出すんだ」  
妖華「だってエロくないですか？ 紺が利と無人島なんて桜「お前が意外と男子の脳みそのがわかった。俺は嬉しいよ」  
哀「普段どんなもん見てるんだ、君たち……」  
桜「エロ妄想の定番ネタだと思えます！ 無人島！」  
利「あのね……、みんな大丈夫？ 自分男なんだけど。気持ち悪くない？」  
薫「今さら(笑)」

葵「そつよ、そこ否定したら薫を否定することになるのよ、気持ち悪いこのド変態ってね」  
薫「言い過ぎ」  
利「薫君はちよつと趣味が変なのはわかってるんだけどさ……桜まで何言ってるんだよ(眉寄せる)」  
薫「そんな俺と付き合ってるお前の変態加減が心配になるけど、いいわけ？」  
利「……ちっ」  
桜「俺もマヒしてきちゃったんだなーやべーなー」  
薫「ここにいる奴ら全員倒錯者なんで今さらだから」  
利「えー……」  
紺「てめーにチン」が立つ奴なんて変態に決まってるんだろ」  
哀「と、代表者がおっしゃっています(全員爆笑)」  
利「あの、そろそろ帰ります(立ち上がる)」  
桜「まあまあまあ(と利の腕を掴む)」  
皓「全員倒錯者とか言ってるけど良い迷惑だよな」  
桜「さすがに皓は哀さんにしか立たない、ってことだね」  
哀「(大いに咽せぬ)」  
葵「いいわねえ、その調子でお願い桜」  
皓「よせよせ(苦笑)」  
哀「桜！ ピンク同盟としてお前を処罰するしかない！」  
桜「ピンク同盟！(笑)」  
利「妖華もか、いいなー」

——そろそろ次の質問に行くよ(笑)。三つ目。葵へ「薫くんとの一夜のチャンスが！ どうします？」  
葵「どうするも何も、頂きます」  
薫「……(しらけた顔で葵を見る)」  
利「そのときは呼んでくれないんだよね？(悲しそうな顔で)」  
薫「おいちよっと待て。お前また、俺が右側だと思ってるだろ」  
哀「専門用語を避けたのに、逆により専門的な知識を披露している薫であった……」  
利「ん？ 葵ちゃんカケル薫君だよな？」  
葵「え？ 当然でしょ？」  
汝緒「……へえ(薫を見る)」  
薫「やめる。お前にそんな目で見られるのだけは避けたい」  
哀「そして薫と汝緒は特別な感情を抱いていることを、互いに今、知るのであった……」  
皓「……」  
利「……」  
桜「……」  
薫「……」  
汝緒「どうにかしろ」  
利「うん。もう、それは仕方ない……。そんな美人同士じゃ、勝ち目ないもん……」

汝緒「お前には頼んでない」  
薫「……言っておく。俺は断じて、右側じゃない」  
哀「そんなに怖いのか？ 受けてことばが」  
葵「アタシはどっちでもいいわよ。今までだってそうだったじゃない？」  
全員「！(二人を見る)」  
薫「……俺はもう疲れた(頭を押さえる)」  
利「何に！？」  
薫「汝緒、お前保護者なんだろ。どうにかしろよ」  
汝緒「都合の良いときだけ返すな」  
紺「(むくりと起き上がり)返せ返せ」  
薫「返しません返しません(手をひらひらと振る)」  
利「厄介もの扱いやめろよっ」  
桜「え、お前どんだけ勘違い！」  
妖華「利の鈍感さって、可愛いよね」  
薫「ただのネガティブ思考ともいうんだよ。……照れ隠しともな(にやっとして利を見る)」  
利「~~~~っ！(唸りながら頭を抱える)」  
哀「可愛いー！」  
妖華「利しつかり(抱きしめて肩を撫でる)」  
利「しつかりできない！」  
哀「愛されて当然って顔しておけばいいのに」  
妖華「するよね」

薫「してるな」  
汝緒「(頷く)」  
利「してない！」  
薫「そういう矛盾したところが、良いんだな」  
葵「薫のノロケが入ったところで、そろそろ次かしら？」  
利「結局答えは？」  
葵「一夜のチャンスなんていくらでもあるのよ、あったのよ。そこで何があったかは、皆様にご想像にお任せするわ」  
利「キスくらい日常茶飯事だよな……」  
葵「そうねえ。一緒にベッドに裸で寝ることも、なんてことないものね」  
利「ひい……」  
薫「やめる、まったく」  
利「うう、せめて上か下かだけは教えて……」  
薫「利！」  
利「(笑)」  
薫「お前本当に陣さんに説教してもらおうぞ！」  
利「ごめんって！」  
葵「昔は、お疲れ様のキスって言って、アタシと鈴音にキスしてくれたのよ」  
利「うわあ」  
薫「……懐かしい」  
利「ええー？」

桜「マジだったんすか！！(笑)」  
薫「ネタネタ。本気じゃねえ。ライヴ終わって勢いで、葵にせがまれて、鈴音が乗った感じ」  
桜「かつこよすぎる……」  
利「目に浮かぶな……両腕にふたりの腰抱いちゃってたんだろ……」  
妖華「やば……(ちよっと顔が赤くなる)」  
利「……なにこれ、何この、ぐちゃぐちゃした感じ(胸を押さえる)」  
葵「ドキドキしちゃってる上にちよっとジエフシー入って、さらに妖華の反応(笑)」  
妖華「美形の薫さんにしかできないことですよ……」  
利「妖華、うっとりしすぎ(困った顔で)」  
薫「今度お前らにもやってやるやってやる(笑)」  
皓「やっぱりフェミニンスト野郎だな」  
薫「女いねえだろ(笑)」  
皓「そうか。……それもどっかと思う」  
利「……確かに」  
——お、次はちよっと真面目な質問だ。四つ目。哀へ「実力世界の「LSD」、曲作りで対立とがありますか？」  
哀「ある」  
葵「選曲会議は貶しあいよね」  
薫「貶しあい……まあ、そつともとれる」

哀「基本的には良いと思ったものを個人個人で持ち寄るけど、やっぱりLSDとして出すなら、LSDの世界観にあったもの、LSDのファンが求めるものでなきゃいけない。だから良いと思ってても、あえて却下なこともある。(LSD全員頷く)」

葵「そこで、これを入れるのか却下するのか、そういうことで意見が対立することはよくあることね」

利「TOURNーの場合は好き勝手やってきたから、LSDの会議のぴりぴりは、ちょっとびっくりした」

薫「もうメンバーの一員だからな、バシバシしごくよ(笑)」

紺「ほーら甘やかしてやるぞ、帰ってこい」

利「そのバカにした言い方……(目を細めて紺を見る)」

哀「結局利ちゃんは甘やかされ担当な気がするからな」

薫「遠慮せずいじめてやってください」

皓「すぐ庇うくせに」

哀「そうだそうだー！」

薫「しょうがねえだろ、どうやって甘くなんだよ」

葵「逆ギレえ？ こんな男のファンでいいの？ 妖華」

妖華「利に甘い薫さん、素敵です」

哀「盲目ファンには何やっても良く見える。お話になりません」

薫「可愛いだろ？(笑って哀を見下す)」

哀「悔しいー！ さっきから思ってたけど、薫って妖華と」

薫「ドラムはいつ叩いてたんだよ」

皓「中学の休み時間とか」

哀「ゲームができない時間(笑)」

葵「あんった皓の教室とかしょっちゅう顔出してたんじゃないの(煙草を指に挟みながら横目で哀を見る)」

皓「本当によく来るんだよ……」

哀「いけないか！」

薫「嫌だなこの過干渉の兄貴……」

哀「いつも俺が先に卒業するだろ？ 辛くて辛くて……(と泣き真似)」

葵「コイツ本気で泣いてたわよ絶対……」

薫「だな」

利「両手に華じゃねえか！ 俺も両手に華してえよ！」

薫「はっはっは。やらねえよ」

葵「悪代官ね」

薫「ういやつじゃ、近うよれ、ってやつな」

哀「俺もやりたーい！(じたばたする)」

薫「お前には大事な弟ぎみがいるだろ」

哀「そらそうだけどー！」

利「すんなりそう言っちゃう哀ちゃんて、可愛いよねえ」

哀「利が言うなら俺は間違いない可愛いだな！」

——そんな哀に皓とセツトで質問が来るよ。五つ目。哀へ「弟さんとは子供の頃どんな兄弟でしたか？」皓へ「同じく、お兄さんとは子供の頃どんな兄弟でしたか？」

皓「どんな兄弟といっても何も変わらない」

桜「皓のスルー力は見習いたいところだなあ」

哀「ピンク同盟、俺に追随しろ！」

皓「こういうやかましい兄でした」

葵「実は引きこもりでした、とかそういうのはないわけね」

皓「少しは引きこもって貰いたいくらいの」

哀「お前は引きこもってゲームしすぎ！」

利「小さい頃から好きなんだ」

哀「暇さえあればやってたよな」

葵「子どもの頃なんて暇じゃないじゃない」

哀「そうだよ結局毎日ってこと」

利「汝緒、なんとか言って」

汝緒「兄貴はまともなのに何でこんな弟になるんだかね」

利「そうだそうだもつとやれー」

薫「汝緒を盾にすればなんでも言えると思ってやがるなアイツ」

葵「ちゃんと要望に応える汝緒ったら、可愛いんだから妖華」利の言うことは最後には絶対になるんです。だから最初から言うこと聞いた方が楽だと思っのに、紺も汝緒も素直じゃないんですよね」

薫「汝緒は比較的早い段階で言うこと聞いてたけど、今」

汝緒「利どうこうより、俺にも思うところがあるだけだ」

薫「ほお……」

汝緒「……(しかめっ面で薫を見る)」

哀「見つめ合わないで！」

葵「心で愛を囁き合わないで！」

薫「うるせえ！(笑)」

汝緒「……(嫌な顔でビールを飲む)」

利「いい。うん、もう、許すよ(腕を組む)」

薫「人の真似するな」

——じゃあそろそろ次に行こうか。六つ目。汝緒へ「ランデブーと言われていますが(笑)、でもあの夜に戻りたいですか？」

利「両手に華じゃねえか！ 俺も両手に華してえよ！」

薫「はっはっは。やらねえよ」

葵「悪代官ね」

薫「ういやつじゃ、近うよれ、ってやつな」

哀「俺もやりたーい！(じたばたする)」

薫「お前には大事な弟ぎみがいるだろ」

哀「そらそうだけどー！」

利「すんなりそう言っちゃう哀ちゃんて、可愛いよねえ」

哀「利が言うなら俺は間違いない可愛いだな！」

——そんな哀に皓とセツトで質問が来るよ。五つ目。哀へ「弟さんとは子供の頃どんな兄弟でしたか？」皓へ「同じく、お兄さんとは子供の頃どんな兄弟でしたか？」

皓「どんな兄弟といっても何も変わらない」

桜「皓のスルー力は見習いたいところだなあ」

哀「ピンク同盟、俺に追随しろ！」

皓「こういうやかましい兄でした」

葵「実は引きこもりでした、とかそういうのはないわけね」

皓「少しは引きこもって貰いたいくらいの」

哀「お前は引きこもってゲームしすぎ！」

利「小さい頃から好きなんだ」

哀「暇さえあればやってたよな」

葵「子どもの頃なんて暇じゃないじゃない」

哀「そうだよ結局毎日ってこと」

利「汝緒、なんとか言って」

汝緒「兄貴はまともなのに何でこんな弟になるんだかね」

利「そうだそうだもつとやれー」

薫「汝緒を盾にすればなんでも言えると思ってやがるなアイツ」

葵「ちゃんと要望に応える汝緒ったら、可愛いんだから妖華」利の言うことは最後には絶対になるんです。だから最初から言うこと聞いた方が楽だと思っのに、紺も汝緒も素直じゃないんですよね」

哀「盗聴器!? (きよるきよるする)」  
薫「まーそこはいいってことで(笑)」  
桜「ランデブーどうなんだよ、オイ〜(ニヤニヤする)」  
汝緒「……(ものすごく嫌な顔をする)」  
葵「ヘッドフォン用意しておけば? (と薫を見て)」  
薫「……いや、いい。聞こう。(手に持ったヘッドフォンを膝に置く)」  
利「鍋食べる人いますか」  
妖華「そんな照れなくてもいいのに、可愛いね」  
利「いないなら自分のぶんしか入れませんよ(鍋の蓋を開ける)」  
薫「照れてるって結構腹立たしいことだけど、オーケー? (利を見る)」  
利「ち、ちがうよ、照れてない。ほらー妖華のせいだ!」  
妖華「ごめん……(と俯く)」  
利「やっ! ちがう、妖華ごめん!」  
桜「早いな〜」  
妖華「みんな利に弱いけど、利は俺に弱いから、ね? (ふふっと笑って利を見る)」  
葵「なるほど、双子ね」  
哀「自信家コンビだ」  
汝緒「自信家というのか……」  
薫「いいから、ほら、答えるよ」

利「じゃあ鍋よそいますね(器を持って野菜を菜箸で入れる)」  
桜「なんだその予告いらねえ(笑)」  
汝緒「ランデブーなんて一度だっと思って思ったことねえのに、なんなんだいったい……(ため息を漏らす)」  
利「……思いませんよね(手を止める)」  
汝緒「ランデブーってそもそも、なんなんだよ」  
葵「デートじゃない。逢い引き。ランデブーはフランス語よ」  
薫「逢い引き。嫌な響きだな」  
汝緒「ただの買物だろ」  
紺「やっぱりはつきり覚えてやがるなこの利マニア(起き上がる)」  
汝緒「(紺を無視して)煙草が切れたっただけだ」  
利「紺はあのときぐっすり寝てたからね。自分が眠れなかったから、一緒に着いてっただけ(白菜を囓る)」  
薫「何もなかったのかよ(じつと汝緒を見て)」  
汝緒「あるわけねえだろ」  
桜「ほんとかあ〜?」  
利「ないよ!」  
葵「嘘よ、ちよっと指と指が触れあってたじゃなあい」  
利「えっ、いや、そんな……! あち!(口元に白菜がべとっとつく)」

薫「動揺しすぎなんだよな……」  
桜「おいホントか? 指と指、触れあっちゃったのか?」  
汝緒「……(黙って紺のポケットから煙草の箱を抜き取る)」  
紺「こいつそんなことまで覚えてやがる(舌打ち)」  
利「あれはたまたま、ぶつかっただけで!」  
薫「へー」  
皓「薫と会う前なんだろ。しょうがねえな」  
薫「そうですね」  
妖華「薫さんは心配することないじゃないですか、もう利は薫さんのものなんです」  
利「妖華ちゃんのものもあるよ」  
哀「汝緒のものもあるよ」  
薫「黙れこのバカ」  
紺「俺は? (とニヤニヤして利を見る。泥酔の目)」  
利「(ため息混じりに)紺のものもあるよ」  
紺「なんだその態度!」  
哀「やれやれってことですよ」  
葵「アタシがいるじゃない! (胸を叩く)」  
紺「……(目を逸らす)」  
葵「天邪鬼は困るわね」  
皓「お前には天邪鬼じゃないだろ」  
桜「それで、戻りたいの? あの夜に(夜を強調する)」  
汝緒「……戻れるわけないだろ」

薫「戻れるならって話だろ。戻られたら困るんだけどね」  
汝緒「非現実の話はどうでもいい」  
薫「訊くけど、戻ったらお前、素直に利に言うのか」  
汝緒「……何を。(煙草を出す)」  
利「……吸いすぎじゃね(横目で見て呟く)」  
桜「吸わなきゃやってらんないよ(うんざりした顔で)」  
妖華「桜は関係ないのに(笑)」  
薫「あの頃に戻れるなら、素直になれるのかよ(じつと汝緒を見て)」  
汝緒「そんなのわかんねえよ」  
利「……」  
汝緒「なったところでどうもなんねえだろ(火を点ける)」  
葵「あの頃にはもう、利のこと愛してたんじゃ?」  
汝緒「……。 (黙る) なんてこんなところでそんな話しなきゃなんねえんだよ(苦笑)」  
哀「認めちゃった」  
汝緒「(髪を掻き上げて顔を曇める)」  
利「あの……あまり汝緒さんの機嫌を損ねないでくださいませうか……」  
桜「からかわれ慣れていないので(笑)」  
薫「大人数で話すこともねえな、確かに。今度タイムンだな」  
葵「やだ。殺る気ね」

哀「やる気だ」

皓「哀(頭を叩く)」

薫「万が一そんなことになったら、利くん、仲間に入れてやるからな(笑顔で利を見る)」

利「え……」

桜「3P来ました!」

利「ぶっ(嘔く)」

妖華「紺も入れてあげてください」

桜「ぶはー!(爆笑)」

葵「あらやだ利の身がもたないわね、数も足りない!」

皓「何の……(すぐく冷めた目で葵を見る)」

利「……!(コンコンコンと咽せている)」

薫「いやー、もうちょっと利が体力ついてからかなー」

桜「紺も入れてあげてくださいって、俺別の意味に聞こえちゃったよ!(なおも笑い続ける。紺が後から腕を伸ばして首根っこを捕まえる)」

葵「やだそっち! そっちの意味!?!」

紺「いい加減にしるテメエら!(立ち上がる。グラスがひっくり返る)」

全員「あーあー」

汝緒「……単純馬鹿(呟いておしほりを卓上の水たまりに投げる)」

妖華「でも三人に愛される利……美しい……(うっとりし)

て上向く)」

利「よう、か……!(気管支に入って咽せ続ける)」

桜「さんざん色々辛いシーン見てきてよく言えるな……(げげほと咳き込みながら苦笑い)」

皓「変態だらけだということがわかった」

――で、では七つ目。紺へ「好きな人に着てほしい服装は?」

紺「好きな人オ?(ゲップをする)」

利「汚えつてば!」

哀「と、好きな方が申しております」

紺「悪かったな!」

葵「もう否定もしないんだから可愛いわ!」

妖華「何着て欲しい? やっぱりメイド服?」

紺「趣味じゃねえ」

薫「中二病の紺としては、ナース服だろ」

紺「それはテメエの趣味だろ」

薫「そりや見たいですけど」

利「本当に変態ばっかだ」

哀「着物姿も見たいな」

桜「そついや着たところ、生で見えないな!(と利を見る)」

利「なんで自分見るの(襖にお茶下さいと頼む)」

薫「そついや誰とはひとつも言っただけだ(笑)」

葵「必要、ある? 無駄な会話が増えるだけよ」

利「いや自分関係ないし。まさかナース服とかメイド服とか、着て欲しいなんか思われてないだろうしねえ!?(ト

スのきいた声で)」

桜「……こええ」

薫「いいじゃん、可愛いよ」

利「あのさあ……(ため息)」

妖華「似合うよ、絶対に!」

利「妖華と一緒に着てくれんならいいけどさあ」

桜「いいんだ。いいんだ(笑)」

妖華「俺はいつでも着れるよ?」

利「……。やっぱ妖華だけがいいよ」

紺「メイドは趣味じゃねえ。ナースは許す」

葵「ナースが見たいそうですわよ」

紺「言っただろ!」

葵「言ってるじゃない(笑)」

利「だってあれスカート短し、胸ないとダサくない?(両手を胸にあてる)」

紺「どれ(手を伸ばす)」

薫「オイ(はたき落とす)」

葵「利のストッキングは魅力的ね。あのナースサンダルから出る小指とかきつと綺麗だわ」

利「マニアック……(あぐらをかいて足を見る)」

汝緒「怖いわ(苦笑)」

哀「あ、汝緒今想像したな、エッチ!」

汝緒「なん……(言い切る前に疲れた顔)」

薫「ナースキャップ、似合うな、今の頭(目を細めて利を見つめ)……うん。やべえ。似合いすぎる」

桜「今投影しましたね、投影しましたね!」

薫「俺の心を覗くのはやめる(笑)」

利「着てごすんだよ、だいたいさあ(ハの字の眉を搔く)」

葵「どうって……」

哀「意外と利ちゃんは下ネタいくよね」

利「なにそれ!(目を丸くして)」

葵「いくよね」

皓「黙れよ(笑)」

妖華「金髪の頃だったらイメクラっぽいけど、今の頭だとリアルだね!」

利「すっごい笑顔……(隣の妖華を圧倒された顔で見上げる)」

薫「イメクラって。とんでもねえこと言いやがって」

紺「あ……(頭を搔く)」

哀「あ、ムラムラしてきた(笑)」

紺「……」

桜「……マジかよ……(笑)」

利「……」

薫「……。今は着るなよ」

利「着ないわ！」  
薫「つか俺の意見だった。紺からはまだ出てねえや」  
紺「なんだっていいよ(ふてくされた顔)」  
薫「何でも可愛いってさ、利」  
利「ありがとーございます」  
紺「誰もおめえとは言ってるねえし」  
薫「他に好きな人ができたってさ」  
利「あー、そうなんだ……」  
紺「……」  
哀「それは淋しい利であった」  
利「子離れかあ……(両手で頬杖をついて)」  
紺「オイ」  
汝緒「一番親離れできてない奴が(横目で利を見る)」  
利「……！(ぎくりとした様子で)」  
薫「あー、ほんとだ(笑)」  
利「っで、できてるよ！ できてんじやん！」  
薫「甘やかされて育ったから、お前も子を甘やかすんだな」  
利「……」  
汝緒「否定できないな(笑)」  
利「……！(悔しそうに汝緒を見る)」  
妖華「利が薫と汝緒さんふたりにいじめられてる！」  
桜「エロ男子が反応した」  
葵「エロ男子じゃなくて、腐男子よ」

薫「腐男子！？ んなのもあるのかよ……」  
皓「世も末」  
利「で、紺は他に好きな人がいるみたいだし、その人に着てほしいものは何でもいいってことで終わりでいいね(届いたお茶を受け取る)」  
紺「……」  
薫「これでお兄さんも一安心だ(わざとらしく胸をなで下す)」  
紺「ナース……！(突然大声で叫んで空のグラスで机に叩く)」  
利・薫「え？」  
紺「……ナースでいい」  
利「……」  
葵「あらあら(にたにたして口元押さえる)」  
哀「紺をもっと泥酔させたら、どこまで言うと思う？(聞こえる声で葵に耳打ち)」  
葵「堂々告白とか、するんでしょうねえ……」  
紺「するわけねえだろ！」  
汝緒「……このバンド辞めるかな」  
利「ちよっとちよっと！」  
皓「気持ち、わかる」  
——では八つ目。妖華へ「イチゴの飴が印象的です。普段から持ってるんですか？」  
利「持ってるよね」

妖華「うん。鞆の中にも、ポケットのある服ならポケットにも」  
桜「食い過ぎなんだよな」  
妖華「最近はそのんな食べてないよ」  
葵「良かったわ(ほっとため息)」  
哀「いくらピンク同盟といっても、限度ってものがあるから(頷く)」  
桜「姐さんたちにも心配かけちゃってんだな。栄養偏ってそうだもんなあ、お前……(と細い二の腕を掴む)」  
葵「バランスは大事よ。甘党は誇るべきものじゃないわよ(と薫を見る)」  
薫「栄養はとってますよ、甘いものしか食わないわけじゃねえし(唇を尖らせる)」  
利「はい、お野菜食べてくださいよ(いそいそと器に鍋をよそい、妖華と薫に渡す)」  
桜「オカン……」  
葵「あ、タンパク質もね。タラ入れてあげて、タラ」  
利「はいはい(菜箸でタラを器に入れる。紺の分の器も作って渡す)」  
桜「やっぱオカンだ」  
薫「確かに一番栄養偏ってそうに見えるな」  
葵「どうしてもね(笑)」  
妖華「でも汝緒のご飯食べてるから、いいはずですよ？(食

べながら)」  
薫「オカンは汝緒じゃねえか」  
汝緒「ふざけんな」  
紺「あー、コイツは、オカンだ……(ほんやりしながらタラを啜る)」  
汝緒「死んでもご免だ、お前の母親なんて」  
哀「利と汝緒の子ってさつきも言ってたし？」  
薫「その表現は、いただけねえなあ(哀を睨む)」  
哀「きゃーこわいー、葵おねえさまー(葵にしがみつく)」  
葵「乱暴な男って、いやよね！」  
薫「……面倒くさ(はっと笑う)」  
利「でも、その言い方だと汝緒が生んだことになるよね。ってことは、自分が、旦那さん……？(顔を指差して)」  
薫「……よせ。よせ。食欲がなくなる(箸を置く)」  
汝緒「こつちが食欲なくなるわ」  
桜「色々な意味で(笑)」  
妖華「利の子にはなってみたいなあ」  
利「え、マジ？ 大歓迎だよ！」  
薫「子どもと妻を取り合う旦那の姿が目には浮かぶんですけど」  
葵「たまに在るわよね、そついう夫」  
利「隠れて一緒に飴を食べる図も浮かびますけど……(目を細めて薫を見る)」  
妖華「俺の甘党は、薫さんから引き継がれたものなんだ！



(両手を合わせて目を開く)「  
桜」まるで事実かのような喜び方だなあ(笑)「  
薫」可愛いだろお？(トヤ顔で哀を見る)「  
哀」悔しい！ピンク同盟総長として、レッド総長を退治する！(薫を指差す)「  
利」レッド総長！ 悪そう！「  
薫」なんでだよ、普通赤つつたら、正義の味方のリーダーだろうが！「  
紺」ケツ」  
薫「そこにいるのが悪役だろ(と紺を見る)「  
紺」俺からすりやテメエが悪役だ」  
桜「それはない(笑)「  
薫「即却下(笑)「  
利」どう考えても無理じゃんね」  
紺「うるせーよ！」  
汝緒「……それしか言えないだろうよ(笑)「  
葵」紺ちゃまはみんなから愛されてるわ。お兄さん、嬉しいー！「  
皓」大変だな、性別がころころ変わって……」  
——では二回目最後の質問。桜へ。」ひとり正気を保っていられたのはなぜですか？」  
桜「正気……保っていられなかった気もするけど(苦笑)「  
葵」限界来たって瞬間、あったものね」

利「そうだね……桜が壊れる瞬間、見たって感じがした」  
薫「壊れる、ねえ……(ため息)「  
桜「さっきも言ったけど、俺キヤパ広くないんすよ。薫さんが五万人入る東京ドームだとしたら、俺なんか三十人くらいしか入らない地方のライヴバーだから(笑)「  
薫「(しばらくウケている)ないって。俺ドームほどねえから。むしろ逆じゃねえか？」  
葵「逆とまではいかなかったもアンタは渋谷以下よ(笑)「  
薫「少しは大人になりましたんでね(笑)「  
桜「ていうかこの場合何をさしてキヤパつってるかであってですねえ」  
薫「神経のキヤパでいうと俺は少人数向け(笑)「  
利「そんなことないじゃん」  
桜「薫さんは超デカいじゃないすか。悲愴の頃ってまだ色々ありましたしね……。今回の場合は頭の良さつつんですか？ 頭の広さ！(こつんこつんと頭を人差し指で叩く)「  
哀「心のデカさじゃないの？」  
桜「別に大きかないですよ。それ言ったら、利がドームレベル(笑)「  
全員「あー(方々から納得の声)「  
利「いやーちっさいっすよ、俺！」  
薫「誰だよ(笑)「  
紺「ケツの穴は？(ケラケラと笑う)「

利「……」  
紺「ケツの小せえ奴っていうけどお前の場合は——って！(言いかけて利に頭を殴られる)「  
汝緒「学ばないな……(呆れた顔で紺を見る)「  
利「ほんっとくに、馬鹿だろ！(顔を真っ赤にして)「  
葵「下品なのは嫌うわよね。さすが陣さんの育てた利だわ」  
紺「ってえなあ……(しかめ面で頭を押さえる)「  
薫「お前はセクハラだよ。しかも笑えないレベルの。いい加減にマジで嫌われるぞ」  
利「ほんとだよ」  
哀「そんな紺も愛しちゃうんだから、利ちゃんはやっぱりドームレベルの心の持ち主だよね」  
利「そういう意味ではそうかもね、こんだけ嫌なことされてまだ大黒ふ頭に浮かべてないんだからね」  
桜「だから怖いって(笑)「  
利「ほんと、桜はすごいよ。こんなメンバーっていうか紺によく付き合ってくれたよ」  
桜「まーなー(笑)で、俺の場合、頭悪くてキヤパ小さいから、何でもこんなことになってるんだってパニックで、ブツンって切れちゃいましたね」  
利「でも正気は保っていたように、見えるんだよね。辛かったのはわかったけれど」  
桜「正気を保つてどっいことなんだろうな。俺が正気

を失ってたら……(利を見る)「  
利「何……(ちよつと驚いた顔をする)「  
薫「正気を失う失わないっていう基準が、何になるのか」  
桜「利にいるんな意味で手を出さないってことなら、俺も妖華も、正気ではあったけど」  
利「……いろんな意味で」  
桜「うわー！ ってたったかどうかっていえば、俺も正気は保っていなかったかな」  
汝緒「お前に怒鳴られるのは、もう勘弁だ」  
桜「あーありましたねえ、そんなこと(目を細める)「  
葵「三十七話ねえ。シリーズ史上もっとも痛々しいあたりよね(顎に手をあてる)「  
利「怒鳴ったって、何が？」  
薫「ん？ ああ、お前はまあ、いいんじゃないの、色々思いついてさなくて」  
利「気になるなあ……」  
妖華「気にしない方がいいよ」  
利「うーん。桜を怒鳴らせるって、汝緒さん、何したの？」  
汝緒「……(苦笑)「  
桜「何って、俺にじゃねえしなあ……まあいい。利は関係ないってことにしておこう」  
薫「危険回避」  
桜「頭のキヤパ的には限界値すぐ超えましたよ。たしかに

汝緒に怒鳴るなんて、俺命知らずだなあ(笑)」  
薫「ホント、一番強い男だよ(煙草を啜える)」

桜「つかなぜ正気を保っていられたかって質問の答えにはなっていないかもしれないけど。もし俺が正気を保っていたってことになるなら……なんだろうなあ、俺の中にあんまりそういう要素が元々なかったってことなのかなあ(顎先をぼりぼりと搔いて)」

葵「暴力とかに向かう要素ってこと？」

桜「はい。弱いものいじめとか嫌いなタイプなんで、暴力とか好きじゃないんですね。一種のパフォーマンストツツか、演出ならそれはそれでいいんですよ。バンドのスタイルとかね、洋楽でメタルなんか、ンなもんばっかじゃないですか」

薫「確かに」

妖華「好きってことは共鳴できるからなんじゃないの？」

桜「かもしれないけど、俺はもっと単純に、おーすげーめちゃくちゃだなーウケるーと思ってみてるから。リアル暴力は別なんだよなー。所詮は音楽のスタイルってだけっすね」

薫「エンタメ気質なのかな。メンバー全員がどっぶりやられても、客観的でいられる。そのぶん苦しむんだらうけど……そうだな、狂えれば楽なのに狂えない辛さってのも、あったんじゃないのか」

桜「……そうっすね。逃げたいけど、逃げられない感じですね。何も見たくないと思うんだけど見えちゃう、みたいな」

利「確かにね、パーンってぶっ飛んじやったときのほうが、楽ではあったかもしれないなあ……」

薫「……こんなことが語られるとは。なんか泣ける。いろんな意味で(ため息)」

葵「平和になった証拠でもあるけど……やるせないわね」

利「どして？」

薫「お前がなんでそんな実感をしなきゃいけないかったんだらうって、また思ったただけだよ……」

利「ああ……そういう」

妖華「紺、土下座だね」

紺「……誰がするかよ」

利「いいのいいの。紺が悪いんじゃない。元はといえば、こうなるように仕組まれてたんだらうし……」

桜「やっぱり利の心はドームレベルだな。いっちばんひでえことを実際にやってたのはコイツだったの(笑)」

紺「……(むすっとして黙る)」

薫「平和になった平和になった。ここに一堂に会しているのが奇跡(目を閉じて頷く。全員頷く)」

——さて二回目の質問が全部終わったかな。まだ陣さんたちは到着しないかな？

利「んー、ちょっと待ってね(携帯を覗く)……あ！もう近いって！ どうしようどうしよう！(立ち上がる)」

汝緒「鬱陶しい。落ち着け」

利「だって(眉を寄せて汝緒を見る)」

葵「利がさらに甘えん坊モードに入るのが楽しみだわあ……！」

利「入らないよ！」

薫「もう入ってるよ(笑)」

利「どこだよ！」

薫「声、顔、全部」

葵「可愛くてしょうがないって顔するのやめてもらえる」

薫「そういうお前もしてるよ」

葵「あらそーお？ 出ちゃったかしら(両手で頬をおさえる)」

妖華「葵さんは、陣さんカケル利派なんですな」

利「よよよよ、妖華！」

葵「おっほっほほ！ バレちゃしょうがないわね！」

薫「バレバシだよ……(半目になる)」

利「勘弁してよ！ 何言ってるんだよもう！(この上なく真っ赤になる)」

葵「まだまだお子ちゃまな薫よりも、陣さん派が多いのはわかりきってる事実よー！」

薫「お子様は余計だ」

利「薫君、すごくいい男だよ！」

薫「……なんか恥ずかしくなってきた」

利「本当だよ。薫君は本当に格好良くて優しくて、いっつも大事にしてくれるし！」

皓「これは恥ずかしい(笑)」

葵「もう甘えん坊モードだわ、しゃべり方……」

汝緒「……(しよっぱい顔で利を見上げている)」

薫「なんで俺がいたたまれない気分にならなきゃいけないんだよ(笑)」

葵「フン！ 大人の陣さんには敵うわけないのよ！」

薫「……はっら立つわ。元々勝ち目ねえし戦うつもりもねえのに……」

利「違っって！ 薫君は陣とは違うんだよ。世界一の彼氏だっってー！」

全員「……(黙って利を見上げている)」

薫「……マジでこの空気をどうにかしてくれ(頭を押さえる)」

汝緒「気の毒に(ふっと笑ってビールを飲む。そのとき、襖の向こうに足音が複数聞こえる。全員襖を振り返る。襖が開き、そこにダークグレイのスーツを着た陣と直人が現れる)」

—————〈3〉へ続く—————

(C)2014 VelvetRope NuiArisawa 二〇一四年三月二十三日